

さくらみ川

第五五号 平成十七年十月十五日

熱日高彦神社社務所

電話 〇三三四 六一〇二四一



霜月。色づいた銀杏の葉が、寒さにあたりこらえきれずにはらはらと舞い、苔むした境内はあっという間にいちめんの黄色にかわる。そこへ午後の柔らかな光が差し込んだ一瞬、あたりは黄金色に輝いた。

希望

宮司 黒須主計

戦後六十年目の大切な年が意義深く経過し、日本の国が本場に独り立ちする道筋が見えてきたように思われます。

私たちの国が世界に肩を並べるには、日本らしい文化が花開き、それを自分の力で護っていかなくてはなりません。

いうまでもなく、少資源国日本の大きな宝は、国民の知恵と行動力です。自動車や通信産業などがニューズを賑わしています。方向さえ間違わなければたいへん喜ばしい傾向で、その舵取りだつて知恵です。

さらに、国を護った英霊に感謝と平和の誓いを毎年欠かさなかった政権が大きな評価を得て前進できたことは、喜ばしいことです。資源を輸入しながら自立するには国際平和こそが基本。この平和は他国に頼るのでなく、硬軟相まって自ら護るべきもの。英霊ののぞみを基として、自ら切り開く未来に期待しましょう。

そして、その国の人々の命を支え、自立の基盤となるのは、当地の主幹産業、農業です。今年もいい稔りが収穫できました。誠におめでとうございます。

これからも目前にある課題、例えば耕地の活性化は私達の知恵で、少子化や若者の就職、犯罪など気になる傾向は大人の姿勢で改善して行きたいものです。

七五三詣もつて

十一月十三日(日)を中心に

今年の七五三詣の日にちを十一月十三日と設定してご案内しております。

七五三詣は本来十一月十五日というのが定番。しかし、寒さが速い当地では、少々早めて十月末から十一月前半で行っております。ご都合によってお問い合わせいただけば、出来るだけ応じたく思いますので、早めに申し込まれるようお願いいたします。

十一月十三日は午前十時頃から午後三時頃まで、一応熱日高彦神社拜殿でお願いいたします。準備しますが、その他の日には社務所の神前におまいりいただくようになります。

七五三のお参りは、七歳、五歳、三歳を成長の節目として、氏神様にご覧いただき、今後の無事成長を願う祭です。子どもの成長には、とりまく家族や地域が健全であることが大事です。保護者の方も神前に詣で頭を下げる、その姿を示すことこそ大切であるといえます。

また本人にとっては、厄年や年祝いと同じように、子ども自身の自覚の節目になる年ですので、「まだ幼いから」などと遠慮なさらず、参詣されることをお勧めいたします。

事業 だより

いよいよ具体的に

第一期寄付奉納六百三十万円

境内整備、社殿修復事業につきまして、四期中第一期目のご奉賛を七月よりお願いしております。現在の寄付金額は六百三十万円ほどで、お示した額を上まわる方も多く、おかげさまで順調な進捗状況となっております。氏子以外の崇敬者、事業者などにもお願いをしているところであります。夫々出身者などにお声掛けいただければと存じます。今後とも更なるご協力いただきまますようよろしくお願いいたします。なお、工事につきましては、今初冬に先ず危険木等の伐採を行う予定で進めております。

社頭あれこれ

とじろじろ一七〇個を上回る

神楽は子ども中心に「夏祭り」

インターネットで検索したという仙台の方から、早々と電話で問い合わせがあるなど、広がりを見せてきた今年の夏祭は、神楽会の奉納神楽や花火、有志青年たちの贈り、参拝客を魅了しました。

紙とろうは、幼稚園、小学校、養護学校、はぐくみ学園、それに一般の方々の申し出もあり一七〇個を上回り、絵柄も年々落ち着いた見やすい物になってきています。

舞台では、巫女舞と神楽が奉納されました。ことに子供神楽では佐藤拓摩君(三年)と黒須悠君(二年)がデビュー。家族も見守る中佐藤君は、「すこし緊張した」といいながらもおじいさんから伝授された腰つきで剣舞を見事に披露し喝采を浴びました。

花火は、例年ご奉仕いただいた引地智善さんが亡くなられたため、今年は白石の小関煙火さんをお願いし、篤志の皆様のご奉納で無事打ち上げることができました。

これを支えているのが有志の方々の奉仕贈り。地域青年と地元業者さんのご協力により、今年も参拝者に満足いただける振る舞いができました。

ご協力いただきました皆様から感謝申し上げます。行く夏の夜のひと時、例年以上に盛り上がった夏祭でした。



遺族会などで慰霊祭

忠魂碑 雨の還暦八月十五日

終戦六十年目に当たる今年の八月十五日はあいにくの雨。枝野の遺族会の方々をはじめ、市議会議員や区長の方々など、大勢の参列があり、熱日高彦神社の社務所の特設祭壇で、大変賑々しく斎行出来ました。



香取神社 高魂神社も交えて

神輿担ぎ手懇話会

恒例の神輿担ぎ手懇話会が、去る九月四日に石川口公民館にて開催されました。雷が鳴り響くあいにくの天気でしたが、三十名を越す参加者がありました。今回初めて、関わりの深い香取神社と高魂神社の方々もお誘いし

ました。祭や神輿、地域のことなど、共通の課題について膝を交えて語り合いました。もちろん美酒と旬の肴に舌鼓を打ったのは言うまでもありません。

島田の丘に地域振興基地出現

館島田遊楽会「ふれあい広場」



当初はテント、現在は常設の販売所が建っています。

館島田(三区)有志で結成された館島田遊楽会(会長佐藤勝征さん)が、七月に同区内の高橋に「館島田ふれあい広場」をオープンさせました。地域活性と会員相互の親睦の場として運営することを目的にしているそうです。活動として毎週土・日に市を開いて、会

員持ち寄りの地場産品販売を行っています。現在のところ「予想を超える盛況にうれしい悲鳴」だそうで、固定客から口コミの見物人まで多くの人で賑わっています。停滞気味だった農村部に突然、まったく民間主導で立ち上がった事業。これからの可能性を示してくれるのではと期待されます。運営の秘訣を会長にお聞きしたところ、「一生懸命になりすぎず、先ず楽しむこと」とのお答えでした。

豪雨のたびすばやい対応に感謝

竹内組が車参道補修ご奉仕

この夏も数回の豪雨が当地を襲いましたが、そのたびに竹内組(社長 竹内政夫氏)が車参道補修を奉仕して下さいました。急坂の参道は大雨が降ると川の様になり、深く掘れたり砂利が下まで流されたりして、補修に苦労します。おかげで良好な状態を維持でき、参拝者に安心して利用いただいております。



まほろば

良き氏神様と成るために

葬後の被(ツウゴノムラエ)

近ごろ葬祭会館での葬儀が増し、葬後の被(後被)をどうするかと聞かれます。ここで死の穢れ(ケガレ)と、その被い(ムラエ)について考えましよう。

死の穢れ

世のため人のために尽くした人の来世に、神様はきつとすばらしい安楽を準備して下さっているに違いない。

しかし人間は通常、今の生活「郷里」を捨てて別の処へ移ることは滅多に望みません。やがては自分も行く処ながら、行ったぎり元の姿で帰れない死は、生きとし生けるもの、出来るだけ遅くありたいと願うのが人情です。

そこで死は怖くない。穢れは無いと説く教えも分りませんが、さりとて自ら死を選んだり殺したりすることを褒める人は居ません。やはり「死」は、生物にとつて最も恐るべき、最も忌むべきことです。

考えてみて心が滅入る死こそ最大の穢れなのです。

お被いの思想

わが国には古くから、良いことでも悪いことでも、その作用が他に及ぶ(うつ)る「あやかる」といつ信仰があります。「これは病気がうつつたり、汚い手で握手をしたら相手の手も汚す」と似

ています。それを避けて用便の後に手を洗います。これはお被いの一種。

死の穢れも他に及ぶとして、ついこの間まで「火を交えない」と言つてごく近い身内しかお茶も口にせず、「二度在ることは三度在ると言つて二人目を葬るとき人形を入れるのも、それを避けるためです。亡き骸を、生きていた時と逆の北向きにすることから始まつて、あらゆることを逆さまにするのも同じ忌避で、お被いの思想です。

人間の生活を清浄に護つて下さる神様はこの穢れが有つては喜びにならない。神職が、世の人のために祈るとき、自分が知らず知らず犯した罪・穢を恐れて、禊(ミソギ)をしたり、お祭の最初に「被詞(ムラエトバ)」を称えて被い串(大幣「オオヌサ」で供物や参列者を被います。

よい日常を続けるため、心身や物、家(処)などを穢れから隔絶する。これが被いです。

葬後の被(後被い)「アトムラエ」

お葬式を出した後神職が「葬後の被」後被いをします。「死」の穢れに染まつてしまったその家や家族親族、参列者からその穢れを取除いて清々しい日常に早く戻そうと被うのです。

亡き骸も葬式も清らかに装つてはいますが、その雰囲気や我が家に持ち帰ろうとつう人も、あやかりたい人も居ません。実際は、この雰囲気から早く抜け出して日常生活に戻りたいと思つはず。

その上、自宅に入るとき、自分の身に塩を振り、幾重にも被うのです。「死」の著しい穢れか

ら隔絶し、日常に戻るつとするのが葬後の被と言えます。

祖神となる後押し

ところで、後被をしたうえに喪家には喪の期間があつて忌籠り(イミコモリ)ます。では被えは効果が無かつたのでしょうか。これには併せて古い大切な意味があるのです。

日本の氏神様は、実は先祖の御霊(ミタマ)であります。甲い拳げ(三十三忌等)を終えた霊は神に成るのだとされています。

神葬がわりと多い四国地方では、その葬式の中で「大被詞(オオバヲエトバ)」最も詳しい被詞(を)を何べんか唱えることが報告されています。死者の霊を早く神に近付けるため穢れを最大限被うもので、その後の御霊祭(ミタマツリ)「当り日」でも行われます。

江戸幕府が葬祭を仏式に一元化する以前から、死者の穢れを被い落とし、清らかな神として神棚にお迎えするのが、生存者の大切な役目であつた様です。

葬式が仏式になつて幾百年、神職による被いがこのように続いているのは、この辺に在るようです。葬後の被いは靈魂の被いでもある。死そのものの穢れと、現世で犯した罪穢も、被い清めて立派な家の神になるように。そこに大きな安らぎがあるのだと考えられます。

古くから伝わる習俗には、深い意味と、豊かな感性が秘められているもの。大切な文化として守り伝えたいものです。

お日高さんの自然

熱日高彦神社の森にも自生する

ドクツルタケ 猛毒キノコ

十月のはじめ、岩手県の六十歳代の夫婦のドクツルタケによる中毒事故がテレビなどで報道された。妻は死亡、夫はいまだに入院中で重症ということである。このドクツルタケは神社のモミの木の下などにも発生する。全体が白く、柄にはツバがありだんだら模様が見られる。ベトツとした感じで、大抵の人は少しも食欲がわかないキノコであるが、まちがうとすればオシロイシメジなどが考えられる。一〜三本位で散生し、いわ



ドクツルタケ

ゆるシ口をつくらぬ。このドクツルタケの毒には体重六十キロの大人を死亡させるだけの威力があるといわれている。中毒症状は、初期の段階で

は吐き気やめまいを訴え、やがて後期になると肝臓や腎臓の組織が破壊され死に至る。現代医学でもこの治療方法は無い。

一方、二、三日前宮城県内のキノコ中毒事件が新聞に載った。中毒にあったものはドクササコである。このキノコは別名をヤブシメジまたはヤケドキンと呼ばれる。地味



ドクササコ

で主としてササやぶなどに発生する。たぶんナラタケとまちがえたのだろうと思われる。なお、昨年大さわぎを起こしたスギヒラタケ

は、青酸カリを含むことがわかり猛毒キノコの仲間入りをすることになった。キノコの食毒の判別に王道はない。細心の注意を怠らず、あいまいな判別をせず、疑わしいものは口にしないことが、中毒をなくす最良の方法である。

写真 山溪フィールドボックス

(文ノ小島和夫氏)

『きのこ』より

神社Q&A

Q 子供夫婦のアパートには神棚が無いが、受けたお札や破魔矢はどうすればいいの？



高さは目通り以上に南か東を向けて

A ほとんどのアパートやマンションには神棚は設計されていませんし、取り付けることができない場合が多いようです。それでいながら子供の七五三のお札やお正月の破魔矢などを粗末にはできない。

神棚というごとく、もともと座敷の梁や奥の間に棚を設けお札などをお祭りしていた訳で、必ず立派なお宮が無くてはならないものではありません。明るい部屋の、日向きの箆筍やボードの上を定めて整え、お札をお祭りすれば、そこがその家の神棚となるのです。そもそも、実家を出て別に居をかまえたらそこは立派な「家」。ぜひ家の中心、家族の心の支えとして、神棚を設け家の守り神様「氏神様」をお祭りいただきたいものです。無料でお分かちできる簡易なお宮、自立木枠の御神像(歳徳神さま)立てなどもご用意してあります。気軽に相談ください。

おしらせ

平成十八年版

『宮城県神社祭事暦』できました



一年の暦はもちろん、日常の習慣や神社のことが良くわかる総合誌です。各区総代または社務所にてご購入ください。販売四〇〇円

厄年被・歳祝いの確認はお早めに

歳祝いや、同級会を兼ねた厄被いのお問い合わせ、お申込をいただく季節になりました。平成十八年の厄年は次のとおりです。

- 男性 二五歳(満二四) 昭和五七年生まれ
 - 四二歳(満四一) 昭和四〇年生まれ
 - 六一歳(満六〇) 昭和二一年生まれ
 - 女性 一九歳(満一八) 昭和六三年生まれ
 - 三三歳(満三二) 昭和四九年生まれ
 - 三七歳(満三六) 昭和四五年生まれ
- 太字は大厄 前後一年は前厄・後厄

「ご奉納・ご奉仕

米、野菜、果実など奉獻

各区 神社総代各位(夏季例大祭神饌)

一区 佐藤幸男、斎藤正志、斎藤實、

斎藤公一、佐藤俊一、只野安博、

只野吉次、佐藤雅邦、木幡市郎、

赤坂誠、赤坂敏栄、赤坂昭海、

斎藤茂夫、黒須嘉次男、八島等

二区 室井君夫、渡辺郷司、只野政義、

斎藤仁、戸村賢治

三区 中野栄喜、佐藤善一、三品久志、

酒井貞八、小野良雄、戸村巧、

佐藤和由、小野勝

四区 佐藤武覚夫、佐藤敏、戸村真喜夫、

戸村勝雄、佐藤孝一

枝野 笠松英明、星智宏、遠藤信

横倉 柄目克子

大内 阿部喜六、

福島 黒須みね

相馬 菊地恵美子

神具など奉納

三区 佐藤善通(神輿担手木札)

境内整備など奉仕

二区 富田正(配線)、竹内政夫(道路)

三区 佐藤勝征(整備全般)

角田 黒須清一(除草)

順不同、敬称は略させていただきます。

祭典中ご芳名を紹介した件は割愛させていただきます。

社頭暦

十月 一日 月次祭

六日 ご縁日

十一月 一日 九月節句(旧九月九日)

六日 月次祭

六日 ご縁日

一三日 七五三詣

二三日 新嘗祭

十二月 一日 月次祭

六日 ご縁日

三一日 大祓 越年祭

編集後記

九月に浪江の神社で、お祭り準備中のお世話の方が蜂に刺され亡くなる事故がありました。先日テレビでスズメバチの事故を防ぐ妙案を紹介していました。円筒型ペットボトルの上カーブのあたり3箇所16ミリ角の穴を切ったものに、砂糖750グラム・酢600cc・酒一升を混ぜ四分の一ほど満たします。これを日陰の軒下や庭木の枝に数箇所吊り下げると、蜂の数がかなり減り、事故も防げるとのこと。神社や社務所の周辺に何本かぶら下げたところ、あら不思議、蜂が勝手に入りおぼれてしまっではありませんか。驚くほどの効果です。益虫とはいえ参拝者の命にかかわること。人の領域のみを護るのであれば、神様もお許し下さるでしょう。

<http://hitaka.org> atuhitaka@hitaka.org